

Y4-40

外来看護師の地震災害に対する意識調査

仙台赤十字病院 外来

○阿部 理恵、菊池 真紀子

【目的】外来看護師の地震災害(以下災害)に対する意識調査を行い、今後の外来災害対策の一資料とする。

【方法】対象者は赤十字病院のA病院外来看護師43名で、調査期間は2010年4月28日～5月7日に行った。調査方法は、自作による質問紙35項目のアンケート調査である。分析方法は、地震災害訓練『参加』群と『不参加』群の2群にわけて単純集計・ χ^2 検定を行い、 $P<0.05$ を有意とした。倫理的配慮として、回答は無記名で統計処理を行い個人が特定されないこと、調査への協力は自由であることを文面で説明し、回答をもって同意とした。

【結果】有効回答41名(有効回答率95%)、平均年齢41.3歳、看護師経験平均年数17.2年、外来勤務平均年数5.2年であった。『災害に対する日頃の備え』では、「災害時の家族との連絡方法」、「災害時の非常物品の準備」、「災害の行動に関して家族間での話し合い」などに有意差はなかった。『災害に対する赤十字病院の役割』では、「災害拠点病院としての認識」、「救護活動への参加意欲」、「震度6以上の地震発生時の病院への駆けつけ」などに有意差はなかった。また『災害発生時のマニュアル行動』では、「災害発生時の指揮系統の理解」、「患者の安全確認」、「患者の誘導」などに有意差はなかった。一方、35項目中「トリアージの方法」($P<0.001$)、「災害対策マニュアルを読む」($P<0.01$)、「災害に対する危機感」($P<0.03$)、「災害救護に対する赤十字病院としての使命感」($P<0.03$)において有意差があった。

【考察】外来での災害訓練は、外来看護師の災害への危機感や赤十字病院としての使命感、災害看護への学習に影響を及ぼしていると考えられる。また、重要な災害対策の一つであるトリアージは、訓練によって培われるものと考えられる。よって、今後も多くの患者が広範囲に行動している外来において、災害訓練を重ねる必要性が示唆された。

Y4-42

皆既日食時における十島村での医療救護活動について

鹿児島赤十字病院 医療社会事業部

○永井 慎昌、川崎 靖貴、古別府 裕明、石橋 和久、松田 剛正

【はじめに】2009年7月22日鹿児島県十島村には継続時間が今世紀最長の皆既日食を観測するため、多くの観光客が訪れた。鹿児島赤十字病院は、へき地拠点病院として十島村の医療を担当している立場で、医療救護活動を行ったので報告する。

【背景】十島村は、鹿児島県の南西、種子島から奄美大島に至る太平洋と東シナ海の境界に斜めに点在する12の島々、7の有人島からなる。人口は624名、全長160Kmの日本一長い村である。村営船が唯一の交通手段で、所要時間は6時間から13時間。各島診療所に看護婦が1名常駐し、毎月1-2回医師が診療している。急患発生時は、ヘリコプターで搬送しており、例年20件前後搬送している。

【事前対応】他機関の協力を得て、各島に医師1-2名、看護婦3名を配置。ヘリ搭乗医は、当院医師が待機。関係各機関のヘリに急患搬送協力を要請。急患受入は、医師会を通じて協力を要請。医薬品は、鹿児島大学病院の協力で、観光客の1%程度に傷病が発生することを想定し、準備。関係者による事前の打ち合わせ会を2回開催し、意思の疎通を図った。

【結果】期間中、計1654名を受け入れ、観光客等の受診者は計55名。ヘリ搬送は、20日に頭部外傷で1名。医薬品は通常の診療所保有分で、対応可能であった。

【まとめ】今回は幸い大きな事故もなく終了出来たが、悪天候で熱中症の発生が少なかった可能性があり、むしろ運が良かったのかもしれない。最悪の事態を想定して事前の準備を行うことが重要である。

Y4-41

第四ブロック合同災害訓練に参加後の意識調査

日本赤十字社和歌山医療センター 看護部:救護員教育委員会¹⁾、和歌山赤十字看護専門学校²⁾

○城 真美¹⁾、畑下 眞守美^{1,2)}、北山 加津子¹⁾、寺前 和美¹⁾、加納 昭美¹⁾、西山 恵理¹⁾

【はじめに】2010年5月、第17回第四ブロック合同災害訓練が開かれ、研修生として8名の参加があった。今回参加した研修生に対して質問紙調査を行い、意識の変化を知ることができたので報告する。

【方法】質問紙は、無記名の自由記載とした。研究の動機や目的を用紙にて説明、不利益が生じないことを口頭で説明した。訓練前に質問紙を手渡し、訓練後の回収をもって同意とした。

【結果】研修生のうち10年以上の赤十字勤務者は4名であった。参加前に思っていた災害看護とは、の問いに「迅速な行動」「被災者への精神的・身体的援助」「傷病者への援助」「看護師としてできることをする」「他職種との連携・体制作り」などがあつた。訓練前後での災害看護の違いや変化がないと回答した人は2名であった。参加後に思った災害看護とは、の問いに「落ち着いた態度で、優先順位を考えながら迅速な対応」「冷静に温かく接する、親身になって耳を傾けこころのケアをする」「周囲との連携(報告・連絡・相談・団結)や声かけが重要」などであつた。

【考察】訓練前には漠然とした回答が多かったが、訓練後には具体的な回答に変化した。これは、訓練中に具体的な看護師の役割を考えることができた結果と考える。また、訓練後の意見として、研修生の多数がこころのケアの重要性を感じていた。このことは、声かけを実際に体験でき、こころのケアを知るよい機会となったと考える。訓練前後で意識の変化がなかった人は、日本赤十字社勤務歴が13年、17年と長期就労者であり、訓練前からある程度の知識があり、再確認に繋がっていると考える。

【まとめ】今回、災害時の具体的な看護ケアの体験を通して、災害看護の知識を習得・再確認することができた。

Y4-43

兵庫県台風第9号佐用水害救護報告

姫路赤十字病院 看護部

○濱田 和代

【はじめに】台風第9号の影響で2009年8月9日から10日未明にかけて降った大雨により、兵庫県佐用郡佐用町では川の氾濫による水害により、甚大な災害が発生した。姫路赤十字病院救護班は被害の大きかった久崎地区の町立久崎小学校に救護所を開設し、救護活動を展開した。その活動および今後の課題を報告する。

【活動】活動期間は8月10日から8月20日までであり、被害が大きかったため、近畿ブロックの各支部からの救護班の応援を得て、16個班を派遣、延べ派遣人数は121名であった。活動内容は救護所での診療と巡回診療が中心であり、こころのケア要員におけるこころのケア、地域の医師、保健師とのミーティングなども行っていった。11日間で救護所及び、巡回診療で診療を受けた傷病者は約686名であり、創傷が27%と一番多く、次に皮膚科疾患、内科疾患、整形外科疾患の順に多かった。特に創傷では擦過傷が一番多く、避難時にできたものは少なく、後片付け時に受けた傷が多くなってきていた。また、結膜炎なども増加してきていた。日を増すにつれ、復興に対する不安や疲労、また、不眠を訴える方も多くなってきていた。

【今後の課題】今回の活動を通して、1. 情報伝達 2. 保健師との連携 3. 地域の病院との連携 4. 災害初期の保健指導 5. こころのケア について課題を残した。